

SHOUTS I

ゆーき

振り返ってきた時、

歩んできた道に花が落ちているように。

しおれ、色褪せて、

たとえ蕾のままに終ってしまっても。

堅牢な壁を築いて、

自分を守ってきたけれど、

一体、何から守るつもりだったのだろう。

壁の中で一人になるつもりなんてなかったのに。

電話の声でさとられて、

「なんとなくかけたんだ」とは、
言えなかった。

そんなに上手く聞かれると、
すべてを話したいよ。

けど、

想いを口にしてしまうと、
遠くなることもあるって。

消えてしまうこともあるって。

女友達と話していたときのこと。

「わたしがね、友達に『どういった人がタイプ？』って、訊いたのね。

そしたら、その子、『人恋しい人かな』って、答えたの。」

蓋を開けたら、

美しいものがこぼれ出て、

それを拾うのは誰だったろう。

ただたださやけき言葉たち。

消えそうな言葉ほど、鮮やかに色づくのは

そう、まだ想いを断ち切れていないから。

ボクらは互いに

優しさで傷つけあって、

それが嫌なら離ればいいのか？

苦しい時も

笑って「大丈夫だよ」と言わないで。

ボクは電車に乗って、キミのいる街へ。

この車窓からの景色も

いつかは見慣れるほどに

キミに逢いに行くよ。

次に乗るときは、

あの広告塔の俳優は違ったポーズかもね。

キミが歩く道と
ボクが歩く道は
ときどき交差するね。

寢息が聞こえるくらい

今夜の此処は静かだから。

ボクは本を読むけど、

キミは眠ったまま明日を待つんだね。